

# 妊婦が抱く虐待不安の発生機序の検討

(中間報告)

東京大学大学院教育学研究科 渡 邊 茉奈美

## The Factors Affecting Pregnant Mothers' Abuse Anxiety

Graduate school of Education, The University of Tokyo, WATANABE, Manami

### 要 約

近年、「子ども虐待」ということばが社会に浸透すると同時に、育児中の母親は新たな育児不安のかたちとして「虐待不安」を抱くようになった。本研究では、その虐待不安について、子どもが産まれる前、すなわち妊娠期から抱くことがあるのか、あるとすればその要因は何なのかを明らかにすることを目的とする。妊娠 4-5 か月の間に質問紙調査を行い、その中で同意の得られた母親を対象に妊娠 6-7 か月の間に半構造化面接を実施している。そして今後は、子どもが生後 6 か月の時点で再度質問紙調査、半構造化面接、及び母子相互作用の観察を行うことにより、妊娠期に抱いていた虐待不安がどのように変化するのか、またそれはどのような要因によって引き起こされ、どのように育児に影響を及ぼすのかを明らかにする予定である。本稿では、妊娠 4-5 か月の間に実施した質問紙調査の分析結果を報告する。

**【キー・ワード】** 育児不安, 虐待不安, 育児支援

### Abstract

As a result of the increasing attention paid to child maltreatment in recent years, the fact that some mothers engaged in child-rearing are burdened with “abuse anxiety” has also come to light. This study aims to investigate the following two questions: (1) Do pregnant mothers already have abuse anxiety? (2) What factors affect their abuse anxiety? Survey was conducted during pregnancy checkups at hospitals and semi-structured interviews were carried out with mothers who agreed to join this study. This article reports results of the first survey. Mothers' change of abuse anxiety from pregnancy to postpartum will be reported when their children are 6 months old.

**【Key words】** parenting stress, abuse anxiety, social support

## 問題と目的

### 「虐待不安」への着目

我が国における子ども虐待の相談対応件数は年々増加傾向にあり、ついに 6 万件を超えた(厚生労働省第 9 次報告)。その背景として、「子ども虐待」ということばが社会に浸透することにより、世間の子ども虐待に対する目が先鋭化し、虐待通報が増加したという状況がある。これは、虐待の「早期発見」に寄与していると言えるが一方で、育児中の母親にとって厳しい目で自分の育児を監視されているかのような、育児のしにくい窮屈な環境でもあるとも言える(大澤, 2005)。実際に、育児中の母親の間で「虐待不安」が増加していることも指摘されている(田中, 2010 など)。「虐待不安」とは「育児不安」の下位概念であり、「育児の中で感じられる不安のうち虐待に対する漠然とした不安や恐れを伴う状態」と定義されている(庄司, 2003)。さらに、子ども虐待が社会において過度に「問題」として扱われることにより浮かび上がってきた現代の育児環境特有のものと言え(Choi ら, 2010 など)、全般的な「育児不安」とは発生機序が異なると考えられる。

育児不安は母親の精神的健康や育児の質にネガティブな影響を及ぼすことが知られるが(田中, 2011 など)、虐待不安もまた、育児中の母親の苦悩の種となり、精神的健康や育児の質にネガティブに作用する危険性を孕むものである可能性がある。特に虐待不安は、上述のように現代の育児環境特有のものと言えるため、適切な育児支援実践にあたり、括目に値すると言える。従って、社会の子ども虐待への目を先鋭化させ社会全体での「虐待の早期発見」を目標としてきた虐待一次予防実践の在り方を見直し、新たな育児支援を模索することにより、育児を行う母親の“安定した育児”を促進することが期待できる。

### 妊娠期からの子育て支援の重要性

妊婦はその胎動等からお腹の中にいる子どもに対し愛着や期待、不安等を抱くことが知られており、このように妊娠期に抱く不安は後の育児にネガティブな影響を及ぼすことが予想できる(本島, 2007)。従って、子ども虐待や不適切な養育を未然に予防しようとするとき、妊娠期から母親の精神的健康状態を適切に把握し支援していくことが重要視されている。例えば 2014 年 9 月に開催される子ども虐待防止世界会議においても、そのサブテーマの一つとして「妊娠期からの親子支援」が掲げられている。

そこで本研究では、次の 2 点を明らかにすることを目的とする。

- (1) 妊娠期に既に虐待不安を抱くことはあるのか。
- (2) 妊娠期に既に虐待不安を抱くとすれば、いかなる要因がそれらに影響を及ぼすのか。

## 方 法

**参加者** 7 婦人科及び産婦人科に妊婦健診のため来院した妊娠 4-5 か月の母親 177 名(平均週数 16.58 週, 平均年齢 31.88 歳, SD=4.47)だった。

**手続き** 婦人科及び産婦人科で実施される妊婦健診時に質問紙を配布した。尺度は予想される育児ソーシャル・サポート(手島・原口, 2003)・Prenatal Attachment Inventory(辻野ほか, 2000)・虐待不安(渡邊, 投稿中)・被養育経験(潜在的児童虐待リスクスクリーニング尺度; 花田・本田・小野, 2006)・特性不安(STAI; 肥田, 2000)を使用した。

## 結果

### (1) 妊娠中に既に虐待不安を抱くことはあるのか。

本研究では妊娠中の虐待不安に関する質問 4 項目について「1. 全くあてはまらない」から「4. 非常にあてはまる」の 4 件法で回答を求めた。どの程度の妊婦が虐待不安を抱いているのか明らかにするため、このうち「あてはまる」または「非常にあてはまる」と回答した人の割合を示したのが表 1 である。

表 1 虐待不安尺度各項目へ「あてはまる」または「非常にあてはまる」と回答した妊婦の割合

項目内容	割合(%)
いずれ自分も子どもにひどく暴力をふるってしまうのではないかと思う	6.2
虐待のニュース等を見ると、明日は我が身かなと思う	13.0
子どもに対してひどく手が出てしまったらどうしようと思う	26.6
状況によっては、自分も虐待をするのではないかという危うさを感じる	22.1

### (2) 妊娠中に既に虐待不安を抱くとすれば、いかなる要因がそれらに影響を及ぼすのか。

妊娠中の虐待不安に影響を及ぼす可能性のある変数については育児不安に関する先行研究を参考に選出し、仮説モデルを設け分析を行った(図 1)。分析には Amos16.0 を用いた。

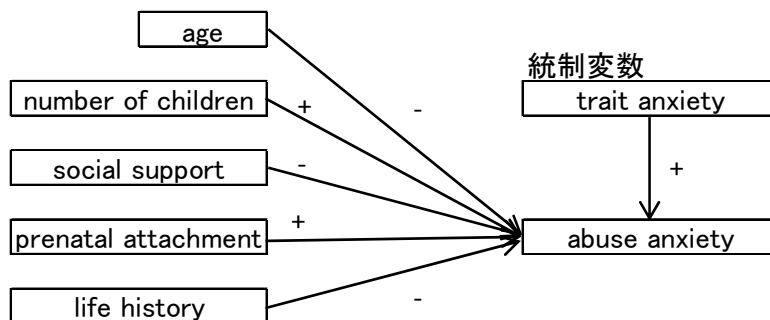


図 1 妊娠中の虐待不安に影響を及ぼす要因の仮説モデル

仮説モデルについて分析を実施した結果、モデルの適合度は低く、特性不安および育児ソーシャル・サポート以外の変数からの直接的なパスは有意ではなかった。このためこれら有意とならなかった変

数のパスをモデルから除外して修正を行い、分析を行ったが、モデルの適合度がより低くなったため、有意でなかったパスを含めた図 2 の仮説通りのモデルを採用した( $\chi^2(15)=118.01, p=.000, GFI=.84, AGFI=.71, RMSEA=.20$ )。

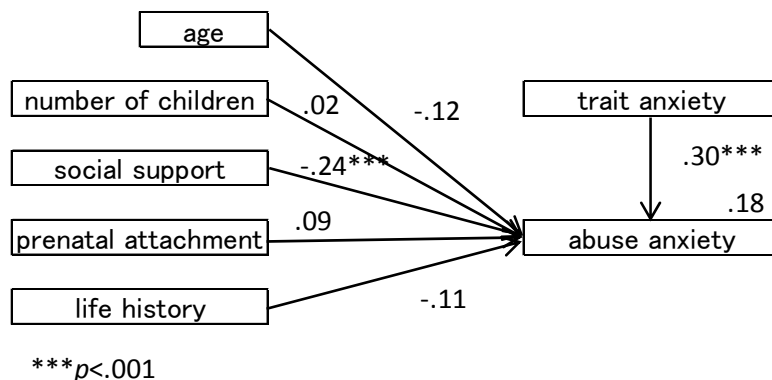


図 2 妊娠期の虐待不安に影響を及ぼす要因

## 考 察

### 妊娠期からの支援の必要性

本研究の結果から、妊娠期に虐待不安を抱く母親が少なからずいるということが示唆された。その中でも虐待不安の高まりには育児ソーシャル・サポートが大きな影響を及ぼしているということが明らかとなった。また、本分析では有意なパスとはならなかったものの、特に次子が第二子、第三子である場合、育児が楽しいばかりではなく大変なことも多いということを経験しているが故に不安が高まるということが、実施中の半構造化面接から明らかになりつつある。従って今後は半構造化面接の結果もあわせて検討する必要がある。

本調査は、一般的に「不適切な育児を行うリスクが高い」と言われる母親を対象としたわけではなかった。それでもこのように少なからず妊娠期から虐待不安を抱くということが明らかとなったということは、妊娠期からの母親へのサポートを充実させることの重要性を示唆するものであったと言える。妊娠期からのソーシャル・サポートに関する情報提供などを通し、安心して育児の準備に向かうことのできる環境を整えることが必要であろう。

### 今後の展望

本研究で対象とした妊娠期というのは、現実に子どもを目にしていないう状況と言える。まだ子どもと接していない妊娠期と、現実に子どもを目にし接するようになる産後とでは、子どもに対する表象や、育児における不安が変化するだろうということは容易に予測ができる。従って、今後の研究では、子どもの発達と共に変化する母親の虐待不安、そしてその変化に影響を及ぼす具体的な要因、その変化がもたらす母親の精神的健康や育児の質への影響を、同サンプルを用いた縦断調査によって丁寧に詳らかにする。そうすることによって、現代の育児環境の現状にせまり、より実情に合った適切な育

児支援の方向性を提供するきっかけとなるだろう。

## 現在の進捗状況と今後の計画

先述の通り、現在、妊娠期の母親 177 名を対象として質問紙調査を実施済みであり、その中で同意の得られた母親(41 名)を対象とし妊娠 6-7 か月の間に半構造化面接を行っている。さらに今後は、産後 6 か月の時点で同一サンプルを対象に質問紙調査、半構造化面接、及び母子相互作用場面の観察を行う予定である。これらの調査を通して、妊娠期から産後における虐待不安に焦点を当てた母親の精神的健康や育児の質の発達の变化を明らかにする。

## 引用文献

- Choi, H., Yamashita, T., Wada, Y., Narumoto, J., Nanri, H., Fujimori, A., Yamamoto, H., Nishizawa, S., Masaki, D., and Fukui, K. (2010). Factors associated with postpartum depression and abusive behavior in mothers with infants. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 64, 120-127.
- 花田裕子・本田純久・小野ミツ (2006). 潜在的児童虐待リスクスクリーニング尺度作成についての検討 子どもの虐待とネグレクト, 8(2), 247-257.
- 本島優子 (2007). 妊娠期における母親の子ども表象とその発達の規定因及び帰結に関する文献展望 京都大学大学院教育学研究科紀要, 53, 299-312.
- 大澤朋子 (2005). 今日の児童虐待対策の矛盾—「虐待不安」拡大の視点から— 社会福祉, 46, 67-80.
- 庄司一子 (2003). 子育て中の母親が抱く虐待不安 日本教育心理学会総会発表論文集, 45, 737.
- 田中理絵 (2011). 社会問題としての児童虐待—子ども家族への監視・管理の強化— 教育社会学研究, 88, 119-138.
- 田中千穂子 (2010). 「虐待不安」から見えるもの 都市問題, 101(2), 84-91.
- 手島聖子・原口雅浩 (2003). 乳幼児健康診査を通じた育児支援: 育児ストレス尺度の開発 福岡県立大学看護学部紀要, 1, 15-27.
- 辻野久美子・塚原正人・飯野英親・市原清志・村上京子 (2004). 児童虐待に対する短大・大学生の意識 小児保健研究, 63(6), 701-707.

